

『ブライズデイル・ロマンス』における 写実とロマンス

市 川 嘉 卓

(1)

Nathaniel Hawthorne が1850年に発表した *The Scarlet Letter* (『緋文字』) は、17世紀のニュー・イングランドの歴史的な素材と、ピューリタンの伝統の中から芽ばえた象徴的な手法の完璧なまでの結合である。これが彼の最高傑作であり、ホーソーンの特徴である「歴史的ロマンス」と「アレゴリー」の融合が最も美しく開花した作品であることは、何人も否定することが出来ない。

これに対して、2年後の1852年に発表された *The Blithedale Romance* (『ブライズデイル・ロマンス』) は、それより約10年前の1841年に作者が Brook Farm でのユートピア社会建設に参加した体験が素材となっている。この作品は、一方でゴシック・ロマンスのころもをまといながら、他方においては作者の面影が微妙に反映されて自伝的な色彩を帯びる。それゆえ、この作品を歴史的ロマンスの『緋文字』と比べてみると、複雑な二重の性格を帯びているのに気付く。すなわち、一見ロマンス風でありながら、同時代の問題が自己を投影する語り手を通して展開されるところに、写実的な小説 (realistic novel) の様相を浮かび上らせるのである。

このようにロマンスと写実小説の入りまじった形の作品に対して、ホーソーンの評判家はおおた否定的な評価を下している。例えば、象徴的な手法からのアプローチを試みる Hyatt H. Waggoner は、身の上話としても失望させる (disappointing) だけでなく、「ロマンスとして読んでも失望させるものだ。なぜならば、そのゴシック趣味は余りにも見え透いており、そのからくりは技巧が凝り過ぎている。」⁽¹⁾と述べている。また、心理的な側面よりホーソーン作品分析に迫った Frederick Crews は、「最近の多くの解明にもかかわらず、『ブライズデイル・ロマンス』がホーソーンの小説の中で最も低く評価されているとしても、その理由はたやすく見いだすことが出来る。」⁽²⁾と考えている。彼はその理由を、「*The House of the Seven Gables* (『七破風の家』) の次に出たこの本は、(語り手) の冴えないおしゃべりと安易なメロドラマの挿話に分裂しているように見える。」と要約する。

たしかに、ホーソーンは長くて孤独な文学的修業の雌伏を経て世に問うた『緋文字』によって、一挙に一つの芸術的な頂点に達した。従って、続いて発表されたいくつかの長篇小説は、代表作の輝きの前に見劣りがしてその存在の色が薄くなっているのは否めない。このため、『緋文字』がホーソーンの凡てを表現し尽くしているかのような印象を、我々に与える結果となっているのだ。事実、『緋文字』以後の試みに芸術的な進歩の跡を認めない批評家も居る。例えば Yvor Winters は、「Maule's Curse」の中で次のように論じている。

「ひとたびホーソーンが原罪の問題をこれら一般論的な表現にまでまとめ上げ、彼の寓意(アレゴリー)を完全な文学的形式にまで高めた時、彼は原罪の処理については、適切な言い方をすれば一回限りですませてしまった。それ以上つけ加えて言うべきことは何もなかった。……それに替わって残されている唯一の道は、極端に片よった寓意的物語から特殊な物語、すなわち小説の技法へと進むことであった。……しかしながら、小説家の手法を習得せんとする彼の努力は続かなかった。なぜならば、彼の精神はその方面に向かなかったからだ。『ブライズデイル・ロマンス』では、彼は写実小説家として書き出したが、終り近くなって寓話を達成しようとしてうまくゆかず、結局は自分を見失ってしまった。」⁽³⁾

これを換言すれば、体質的に寓意作家であるホーソーンは、初めから完成されたアレゴリーを世に送り、その後の写実的小説家に脱皮せんとする一連の軌跡には芸術的成果の跡が見られず、かえってアレゴリーへの逆戻りを露呈したということになる。しかしこの見方とは反対に、ホーソーンの芸術的成長を認める立場に立つ Henry James の存在に我々は気付くのである。ホーソーンをおのれの先達と仰ぐ小説家ジェイムズは、写実主義的な視点から次のような意見を展開する。

まず『緋文字』については、「ホーソーンがそこに盛り込もうとしたごとく、この作品には清教徒精神が、客観的に存在するだけでなく、主体的にも存在している。」⁽⁴⁾と述べてそのニュー・イングランド的な特質を評価する。しかし同時に、「この作品の欠点は私の感覚から見ると、現実感の不足と幻想的な要素、つまりある種の皮相的な象徴の濫用にある。登場人物は性格としてではなく、きわめて絵画的に配列されたある種の精神状態を表現している。」と批判することを忘れない。つまり、写実的傾向の強いジェイムズにとって、寓意や象徴的手法の多用に抵抗感が付きまとうのである。

一方の『ブライズデイル・ロマンス』に対して、ジェイムズは写実小説としての価値を次のように認めている。「語り手の立場は、具体的なものであるという強みを持つ。この語り手は、これより前に発表された物語にあるように、彼の情念にとりつかれ、そして部屋に閉じ込められ肉体から離れた精神ではもはやない。語り手は、ある人間的なまとまりを持つ特殊な人物である。」⁽⁵⁾ すなわち物語の視点が、観念的な存在でなくある具体的な特定の人物に置かれるところに、ジェイムズはホーソーンの新しい試みを認めようとする。彼は語り手だけでなく、さらに代表的な登場人物の一人 Zenobia の創造に賛辞を惜しまない。「『ブライズデイル・ロマンス』の中で最もすばらしいのは、ゼノビアの性格である。私は以前ほかでも言ったが、一人の人物 (a person) の完全な創造にホーソーンがギリギリなところまで接近して試みたアプローチとして、彼女の性格は私を感動させる。」⁽⁶⁾ ここへきてホーソーンが初めて、なまの性格つまり現実感の満ちた人物を登場させたところに、ジェイムズはロマンスから写実小説への展開を認めようとする。

以上、長々と引用してきたウィンターズとジェイムズ両者の見解は、『ブライズデイル・ロマンス』の芸術的な評価に関する限り、このように大きく別れるのである。この評価の分裂はどうして起こるのであろうか。我々はその原因を、『ブライズデイル・ロマンス』が孕む二面性に求めることが出来るのではなからうか。つまり、ウィンターズがホーソーンの本質と価値をアレゴリーに見いだしているのに対し、ジェイムズはそれを写実的描写に置いているからに他ならない。ところで拙論はこの両者のいずれにもくみせず、第三の見解を取るものである。すなわち、ホーソーンは写実的な試みに新しく踏み出したとはいえ、それは従

来のロマンス的な特質を捨てることには決して直結しないのだ。両方の要素を単に併置するのではなく、両者を統合し止揚することによって、新しい型の作品を生み出そうとする野心的な試みであったと理解すべきではなからうか。

ここで用語の上から注意すべきことは、ウィンターズとジェイムズ両者共に、写実的小説の対極に「アレゴリー」という言葉を用いている点である。もともと寓意というのは、「文字通りの表現」(literal expression)と対蹠的な比喩の一種であるが、ホーソーンはそれを、ビューリタンの伝統的な表現様式から編み出したのである。彼の作品ではそれが独特の象徴的な効果を生む。つまり彼の寓意は『緋文字』以外の作品においても、強弱の違いを越えて、神秘的ロマンスの色彩を普遍的に浮かび上らせる。従ってホーソーン作品に関する限り、寓意とロマンス性は、表現とその内容の関係におき替えることが出来るといえよう。拙論では「アレゴリー」の代わりに「ロマンス」の用語を選び、『ブライズデイル・ロマンス』を「写実とロマンス二つの要素の統合」への試みであると考えて、その内容を分析してみたい。

小説全体の流れの中で、ロマンスと写実的小説とは互に異質的であるがゆえに、現実の作品はいずれか片方の要素をきわ立たせて、大きく二つのカテゴリーに分類される結果となる。しかしながら、時としてこの互に異質的な二つの要素は、作品の中で併存し微妙な均衡を保っている場合がある。特にアメリカ小説の伝統という展望に立つと、この特殊性が浮き彫りにされる場合が少なくない。Richard Chase が「写実的要素とロマンスの要素という奇妙で全く異質的なものの混合において独特な文学的混成物」⁽⁷⁾と呼ぶ存在に、我々はしばしば出会うのである。『ブライズデイル・ロマンス』もこのような脈絡の中で捉えると、作者の意識的なあるいは無意識的な狙いが具体化された一つの典型的な作品であると規定することが出来るのではなからうか。

以上の視点に立って、拙論では具体的には、(a)作品の中の語り手の特質について、(b)語り手の目に映る主要な登場人物の特質についてそれぞれ考察して、結末の悲劇へどのように導かれていったかを辿りたい。更にこの作品に盛られているゴシック風ロマンスの悪魔的・神秘的な要素と、語り手の写実的な描写との統合の仕組みを考える。そして最後に、理想的田園の建設とそこに参加する人間の葛藤という二つの問題の関係へと行きつく。すなわち光と陰の象徴的な対照が、どのように調和してホーソーン独特の美的な効果を生み出しているかを考えてみたい。

(2)

「私」なる人物、Miles Coverdale は、本来三流詩人であるがボストン郊外の Blithedale へ向けて Fourier 主義に基づく「現代アルカディア」建設に参加のため出発する。そこで異国風の風変りな花をいつも髪に飾っている裕福で魅惑的なゼノビア、罪人の精神的矯正に凡てを賭けようとする Hollingsworth、そして彼が Moodie なる老人から後事を託された可憐な娘 Priscilla の三人の人物との交流が始まる。カヴァデイルにとって、ゼノビアはかつて結婚した経験があるのではなからうかと疑わせる程、あやしい官能的な魅力をただよわせている。ホリングズワースが自己の目的貫通のためには、他の凡てをも犠牲にせんとする姿勢に、カヴァデイルは博愛主義者の美名の裏に隠された強烈なエゴイズムを見抜く。この両

者に挟まれて都会のお針子生活から脱したプリシラは、明るい田園生活の中で解放感を味わう。カヴァデイルの視点から見ると、ホリングズワースの強烈な個性がゼノビアとプリシラの両者を惹きつけ思慕の念を生み、そこに三角関係をもたらす。理想的な田園建設の裏に醜い人間関係が芽ばえるのである。

ある日 Westervelt なる人物が町からやって来て、ゼノビアとの過去における親密な関係（前夫であること）を仄めかす。一方ホリングズワースから彼の計画の実行に協力を求められたカヴァデイルは、これを拒否して二人の関係は決定的な破局を迎える。語り手カヴァデイルは、やがてプライズデイルを独りさみしく立ち去りポストンへ戻る。しかしながらプライズデイルの人間模様はこれで断ち切れることなく、カヴァデイルの周りに再び現われて展開される。そんな中でホリングズワースは、ウェスタヴェルトのかける催眠術で危く彼の餌食になるところだったプリシラ（=the Veiled Lady）を救い出す。これはゼノビアがウェスタヴェルトと組んで仕掛けた陰謀らしい。この事件を契機として、ホリングズワースはゼノビアからプリシラへ鞍替えしたため、ゼノビアは恋の勝利者から敗北者へと転ずる。加えて、恋のライバルは共にムーディ（=Fauntleroy）を父に持つ異母姉妹であるというえにしが、ゼノビアに知らされる。彼女の誇りに致命的な傷を受け、プライズデイルに注ぎ込んだ己れの富と情熱をも失い、ゼノビアは心理的に追いつめられて悲劇的な入水自殺を遂げる。ホリングズワースとプリシラは結ばれるが、彼の野心的な計画は全く失敗に終る。

以上が荒筋であるが、この物語は冒頭から終りまで凡て「私」なるカヴァデイルを通して語られる。つまり、ある特定の一人称の視点が設定され、そこに凡てが一貫して映し出される。そこで先ずカヴァデイルの人物に焦点を絞りたい。物語の筋からも容易に判明されるように、彼は行動の人ではなくて観察の人である。ジェイムズの小説に出てくる語り手の先駆者とも言えようか。彼は登場人物凡てから一定の距離を置いて、冷静に相手の心を観察し分析することに情熱を燃やしている男である。従って「楽しい社会（プライズデイル）の真ただただ中で、私はしばしば孤独の感情を味わった。というのは、これら三人の人物（ホリングズワース・ゼノビア・プリシラ）が私の私的な劇場で極めて大きく迫ったのに対し、私は皆から友人として多分見なされていたけれども、せいぜい彼等にとって第二番目の、あるいは第三番目の人物でしかないという感じを持たざるを得なかった。」(p. 70)⁽⁸⁾という孤独感に浸っている。

「現代のアルカディア」建設に参加しておきながら、この語り手は登場人物が織りなすドラマの展開を楽しむ観客、ないしは“the Chorus in a classic play” (p. 97) の一員に自分自身をなぞらえている。彼は近くの森の中に、秘密の「小さな隠れ家」(“a little hermitage”)を造り上げて孤独の時を楽しむ。しかしそれは同時に、観察されずに観察出来る視点を拓げることにもなる。ジェイムズはこの語り手に対し、“half a poet, half a critic, and all a spectator”⁽⁹⁾という属性を与えているが、観察のための視点が「隠れ家」にも設けられたことで、彼の視野は複眼的に拡大する。加うるに一旦ポストンの町へ退却してからも、物語の舞台は彼の周りへ移動する。

ところがこの語り手は、読者に対して機械的な報告をする単純無色のカメラ・アイではない。「現代アルカディア」の運動に加わった当初から、彼は観察者的な冷静を保つと同時に、懐疑的・冷笑的な態度をも示す。この姿勢を Richard Harter Fogle は次のように要約する。「カヴァデイルは自分の本当の感情を、冷笑的な言葉で隠す現代詩人でありモラリスト

である。』⁽¹⁰⁾ つまり、彼は「理想的な田園」建設というロマンチックな夢の追求を、初めから醒めた目で眺めているのだ。参加はするが熱中しない冷静さが、周囲の人々には懐疑的・冷笑的に映ってしまう。

このような彼が、三角関係の深刻なもつれを目撃するだけでなく更に係わりを持つにおよび、結末が悲劇的に終ってほしいと悪魔的な願いを抱く (p. 157) のはなぜであろうか。クルーズはこの点について、「カヴァデイルは事態が起こる前に、どのように展開するか前もって知っている存在である。』⁽¹¹⁾と述べている。たしかにこの語り手には、運命の予告者たる役割が与えられているようなところがある。しかし見方を変えれば、「I began to long for a catastrophe.」 (p. 157) というのは、観察の苦しみから逃れたい気持の逆説的な表現であると受け取ることは出来ないであろうか。カヴァデイルは小説の終りで、自分の抱くひとつの秘密（プリシラをひそかに愛したこと）を告白するが、それあるがゆえに全く中立的な観察者ではあり得ない。距離は保っていても決して無関心では居られないはずである。

従って三角関係が深刻になり、観察者がその渦中に巻き込まれてしまったと気付いた時に苦悩が生まれる。「ホリングズワース、ゼノビア、プリシラの三人は私の生活を彼等の内に併呑してしまった。彼等の運命を知りたいという言い表わせない欲求と共に、私自身の苦しみに対する病的ないらだちと、彼等の領分に再び入り込むことへの強いためらいがあった。」 (p. 194) この強い躊躇の気持をもってしても、三人の運命から自分を切り離せない鉄の足かせの力を感じるのである。

三角関係におけるゼノビアの敗北は、プリシラがホリングズワースと結ばれることを意味するが、それはまた、プリシラに思いを寄せるカヴァデイルの心の痛みにも連なる。今まで傍観者であったカヴァデイルは、敗北者に対する共鳴者へと変わってゆく。「全く同一の痛みが、ほとんど緩和されない苦しみを伴って、彼女の心の琴線から私自身のそれへと震えながら飛び込んできたようであった。」 (p. 222) そして今や破滅寸前のゼノビアが、「Ah, I perceive what you are about! You are turning this whole affair into a ballad. Pray let me hear as many stanzas as you happen to have ready!」 (p. 223) と半ば冷笑的に絶望の淵から叫んだのに対し、カヴァデイルは、「Heaven knows what an ache is in my soul!」と答えて、自分の精神的な痛みを明示する。しかるにここで、カヴァデイルの独自性が現われるのだ。すなわち、ゼノビアに対する深い同情の念は、そのまま彼女を愛する行為には発展しない。つまり同情の痛みはカヴァデイルの心底に宿る倫理意識から発したもののだが、同時にその倫理意識はゼノビアを愛する行動をも抑制する力となって働らくのではあるまいか。そしてカヴァデイルの倫理感、作者ホーソンのそれを反映したものであり、正に善悪を厳しく識別するピューリタンの良心に他ならない。

チェイスは、語り手の心の痛みを“an insoluble dilemma”と呼んで次のように論述する。「これは健全な倫理意識ではあるが、写実小説家にとっては芳しくない精神状態である。倫理的問題は作品全体にわたり、ホーソンの関心の的であった。また我々もそこに興味を持つ。しかしながら、もし観察の倫理的な意義を証明するものの代わりに、観察者が見ることの出来るいかなるものでもそれを観察するよう作者が自分に許していたら、彼は更にすばらしい小説を書いていたであろう。』⁽¹²⁾ チェイスは写実性と倫理性は両立し難いがゆえに、両者の併存を企てたホーソンには限界が付きまとうということを言いたいらしい。確かにこの考え方には一理がある。だが拙論の立場からあえて言えば、ホーソンはこの二

律背反的な特性を語り手の資質に盛り込むことによって、新しいタイプの人物を創造したと言えるのではなかろうか。カヴァデイルの写実的な観察眼と内にひそむ倫理感は、互にせめぎ合って心理的な緊張を生み、物事の本質を貫通して見きわめる特異な識別力を彼に与えているのだ。ここに我々は、ホーソーンの独創を認めざるを得ない。

ワゴナーはこの語り手について、「我々は今日こう言いたい。彼は正にジェイムズ的な性格の持主である。つまり、意識と自意識が非常に強く、行動者というよりは思索者であり、皮肉には熱心で、その皮肉を他人に対してと同じくらい自分自身に向けるのである。」⁽¹³⁾と判断を下している。これは全く行動主義的な人物把握に他ならず、ワゴナーは語り手の精神の奥深くに隠された葛藤の痛みとその意味を見過ごしてしまったのではあるまいか。これに対してフォグルは、ワゴナーやチェイスと見解を異にして、すなわち拙論に沿って次のように述べている。「ホーソーンはカヴァデイルを物語の中心に据えることを選んだので、この人物は観察者と参加者の間のくつがえさされてはならない微妙な均衡を保たなければならない。」⁽¹⁴⁾ 換言すれば、語り手は物語のかなめに位して、写実性と倫理性の両立を図っている。従ってカヴァデイル自身の皮相的な行動からよりは、むしろ彼の視点を通して語られる人間関係のドラマの中からこそ、語り手を構造的に理解しその内奥に迫ることが出来るのではなかろうか。

(3)

語り手カヴァデイルが描く主要登場人物に目を向けてみたい。我々はその場合に、語り手の視点に留意しながら、登場人物がどのように語り手と係わり合うかの相関関係を見きわめるべきである。その過程を通して彼等の特質を、そして語り手自身の特質をも掘り下げる事が出来るのである。

まずカヴァデイルの観察できわ立っている特色は、対蹠的な分類による人物群の把握である。我々はこれを登場人物に対する光と陰、あるいは陰陽の二分法 (dichotomy) と呼べないであろうか。例えば、観察の人カヴァデイルの友人でありまたライバルのホリングズワースは、自己中心的な行動の人である。また登場する二人の女性ゼノビアとプリシラほど、対極的な違いをきわ立たせている例はまれである。さらにウェスタヴェルトはブライズデイルの住人凡てに対して、悪魔的な属性を浮き彫りにする。「ピューリタンは、絶対的な善と絶対的な悪の間のマニ教的な闘いを心に抱いたといえる。」⁽¹⁵⁾ とウィンターズは述べている。この視点から見れば、作品における人物配置は、ホーソーンの清教徒的な二分的人物把握の現われであると考えられないであろうか。

そこでまずホリングズワースを取り上げてみよう。罪人の道徳心改善の運動に情熱を燃やす彼が、なぜ「理想的田園」造りに加わっているのか、読者の疑問が生まれるところではある。しかしカヴァデイルは、満足な状況説明をしてくれない。それよりも、ホリングズワースの計画に参加し協力して欲しいとの執拗な懇願に対して、カヴァデイルは頑として拒否する姿勢を示すところに重点が置かれる。これは彼が、「目的のためには断固とした厳しさ」 (“an inflexible severity of purpose”) (p. 43) を貫ぬくホリングズワースの博愛主義の裏に、他の凡てを犠牲にする強烈なエゴイズムが潜んでいるのを、冷徹な観察眼で感知したためである。ホリングズワースのように「ひとつの支配的な目的に身を任せた連中」(p. 70)

の人間性に対する語り手の分析と批判は、邪神の悪徳と偽善の比喩をもって次のように展開される。

「彼等はひとつの偶像を奉りそれに神官を捧げる。そして最も尊いものを生け贄として献ずることを、神聖な仕事と考える。悪魔は彼等に対してきわめて巧妙であったので、この邪神は他の人々には厳しい鉄のような顔を向けるが、この連中はそこに慈悲深い愛のしるしだけを見いだす。そして彼等は、この邪神が周りの暗黒に投影された神官自身の残像に過ぎないということを、一度も疑ってはいない。そして当初の目的が更に高尚・純粋になればなるほど、そしてそれが更に無欲の念をもって取り上げられるほどに、神のごとき博愛心が凡てを貪り尽くすエゴイズムへと墮落してしまった過程に、彼等が気付く可能性は次第に少なくなっていく。」(pp. 70—71)

カヴァデイルはホリングズワースの目的実現に対する可能性を、「空中楼閣」(p. 56)であると冷静に批判しているだけではない。博愛主義のころもに包まれたエゴイズムに、みずから気付かない鈍感さ、換言すれば無意識の偽善的精神に対して、耐えられない嫌悪の念を抱いているのだ。ホリングズワースは目的追求の狂信的・偏執的な強烈さにおいて、『緋文字』の Roger Chillingworth と一脈通じている性格の持主と言わざるを得ない。この偽善的な人物の仮面を剥ぎ取ろうとするカヴァデイルの潔癖な姿勢から、我々は彼の倫理意識のしたたかさを認める。すなわち、エゴイズムの醜悪さを照らし出す鏡としての語り手自身の特質をも読者は感知するのである。

次に悲劇の女主人公、ゼノビアの肖像に目を転じてみたい。「Eve の最初のころもに包まれてすっかり発達した肢体」(p. 17)という語り手が抱くイメージは、Hester Prynne や *The Marble Faun* (『大理石の牧神』) の Miriam 以上に官能的である。カヴァデイルは、彼女の濃艶な美しさに結婚生活の痕跡を推察する。これは、魅惑的な人妻が宿す神秘的な未知の世界に対する、純真な青年の好奇の念と呼ぶべきではなからうか。しかし彼は自分の気持を懸命に否定しようとする。「私はそれを男性が持つみだらさだと思った。つまりそれは邪悪な解釈の罪であり、男が女性に対してしばしば犯す罪である。従って気高く寛大な性格が示すあの美しく自由な、しかし女らしく打ち解けたさまを誤解してしまう。」(p. 47)

カヴァデイルは更に、“Zenobia is a wife! Zenobia has lived, and loved! There is no folded petal, no latent dew-drop, in this perfectly developed rose!” (p.47) という直感的な断定へと達する。そしてこの断定によって、彼はゼノビアを愛することの不能を悟るのである。この不能が、人妻に対する青年の性的な臆病によって惹き起こされたと考えるのは、余りにもフロイド的な解釈であろう。⁽¹⁶⁾ 彼の内面に宿る潔癖な倫理意識が、彼女を愛することへの抑止力として働いていると見るべきではなからうか。

カヴァデイルの懸命な自己否定にもかかわらず、ゼノビアが最も魅力的な女性として読者の胸を打つのは何故であろうか。これはひとつには、彼女が悲劇的な最後を迎えることも係わっていない。しかしそれ以上に、ゼノビアの人間的な現実感が、心憎いまでなまなましく描かれているからではなからうか。この作品が持つ写実的な迫真力の一角が、彼女の描写に現われたのである。ジェイムズはこの点について、「この小説の最も感動的な要素は、野蛮な狂信者(ホリングズワース)が、気難しくて誇高いゼノビアの心をしっかりと握るその過程である。彼女は彼を嫌悪し、彼からしり込みしようとはらゆる点で努めるにもかかわらず、雑食動物のような彼のエゴイズムの淵に惹き寄せられる。」⁽¹⁷⁾と述べている。男性の強

引なエゴイズムに対する愛憎並存の (ambivalent) 女性の気持ほど、人間性の弱さと哀しさを見事に浮き彫りにするものはない。

一方、ゼノビアとは対照的なプリシラはどのように描かれているであろうか。「プリシラの性格と目的に対するゼノビアの軽蔑に満ちた値踏み」(p. 34) に傷つきながらも、彼女は美しい同性の先輩に対して、庇護者としての尊敬の態度を崩さない。ゼノビアに対しては、終始受身の姿勢を貫ぬく。しかしカヴァデイルは、この弱々しい女性に対して、正にその「心地よい弱さ」(“a pleasant weakness”) (p. 74) ゆえに限りない同情の目を注ぐ。「更にプリシラの陽気さは、彼女がどんなに微妙な楽器であり、彼女の神経が何と脆い琴線であるかを私に示す性質のものであった。」(p. 75) 陽気さと脆さが表裏一体となっているプリシラに対し、カヴァデイルは無関心では居られなかった。物語の途中で愛情が芽ばえたことを暗示し (p. 100), 更に結末に到ってそれをはっきりと読者に告白する。

しかし彼は、プリシラに対する直接的な愛の告白を遂になし得なかったのである。その理由を掘り下げてみよう。カヴァデイルがプリシラに対して、「ゼノビアとホリングズワースが本当に楽しく、幸福そうに散歩しているのをごらんなさい。ほほえましい光景ではありませんか」(p. 126) と言うくんだり、語り手自身が認めているように、確かに「けちな悪意」(“some petty malice”) (p. 126) の現われではある。だが、二人の女性を独占する程の自己中心的なホリングズワースとは違って、慎み深いカヴァデイルは、プリシラに対する愛情を「悪意」と受け取られ兼ねない屈折した表現でしか告白出来なかったのではなかろうか。ゼノビアとホリングズワースが仲睦まじい姿を目撃しながらも、なお、プリシラがホリングズワースに心を寄せているのを知り、カヴァデイルは彼女に対する愛の率直な告白を、心中密かに断念したと考えられないであろうか。自分に背を向けているプリシラに愛の告白をすることは、醜いエゴイズムに過ぎないと自己を抑制する倫理感が働らくのだ。このような自己否定の精神がカヴァデイルの倫理性に他ならないが、それは観察への情熱に捌け口を見いだすことになる。

語り手の賛美にもかかわらず、ゼノビアと違ってプリシラは、影が薄い肖像画に過ぎない印象を読者に与える。この点につきジェイムズは、プリシラを取り扱った部分が「最も不出来である」(“least felicitous”) と断じ、その原因を彼女の人間離れした巫女的な資質 (Sibylline attribute) に求めている。⁽¹⁸⁾ この女性は、『七破風の家』の Phoebe や『大理石の牧神』の Hilda と同じ系列に属するタイプであるが、この作品では、余りにも人間的なゼノビアと並ぶといささか個性が弱い。これは作者の代弁者たるカヴァデイルが、プリシラを理想的な女性として描こうとしたがゆえに、人間的な歪みをつけ加えるのを忘れたためではなかろうか。

彼女には人間的な悩み・弱さが現われない。従って、カヴァデイルがか弱い存在とばかり思っていたプリシラは、皮肉なことにゼノビアとの恋の戦いに勝ち抜く強靱さを内に秘めていたのである。最後に彼女は、鉄の如き意志の持主ホリングズワースの失意を慰め、そして彼を救う役割を果たす。しかしながら、人間としての完全無欠さは人間的な脆さの欠除であり、更にそれは人間的な魅力を失うことになる。本質的には弱さの欠けていたプリシラを、あたかもか弱い女性としか認めなかったカヴァデイルの観察力は、愛する女性に対する盲点をさらけ出したとも言えよう。

(4)

語り手カヴァデイルがプリンラに思いを秘めながらも、相手の立場尊重から愛をうけ明けることをためらい、表面的には観察に傾いてゆく。一方ホリングズワースは、ゼノビアとプリンラ両方の女性との三角関係の深刻な狭間にのめり込む。カヴァデイルはそれをかたわらで見守りながら、「ホリングズワースは、彼自身の巨大なエゴイズムの中に呑み込んで独占してしまった二人の女性の心を、どのように処理しようとするであろうか。」(p. 127)と危惧の念を強める。

この三角関係が必然的にもたらす悲劇的な結着に、我々の目を転じてみたい。ゼノビアを資金の面でも、充分利用してしまったホリングズワースは、ゼノビアが絡んでいる陰謀からプリンラを救い出したのを契機に、一転してプリンラへと鞍替えして一気に三角関係の清算を図る。「エリオットの説教壇」(Eliot's Pulpit) と呼ばれる巨大な岩の下で繰り広げられるゼノビアとホリングズワースの対決は、すさまじい鬼気を孕んで迫る。“It is all self! Nothing else; nothing but self, self, self!……” (p. 218)と喝破するゼノビアの言葉には、ホリングズワースの本質を剔抉する迫力がある。彼と共に立ち去りさなさいとゼノビアが求めたのに対し、対決の介添人プリンラが何のためらいもなくホリングズワースとその場を立ち去るのを、語り手カヴァデイルはかたわらでじっと見つめる。プリンラもまた、独占的な愛(engrossing love)をホリングズワースに求めていたのである。

二人に取り残されたゼノビアがカヴァデイルに対し、“Tell him he has murdered me! Tell him that I'll haunt him!” (p. 226)と叫ぶ言葉は、断末魔に喘ぐ人間の自己陶醉に他ならない。このような危機に直面しながら、語り手カヴァデイルは結局ゼノビアを自殺から救い出す方策を見つけることが出来ない。彼女に対する十分な同情を抱きながら、実際に手を差し伸べて助け出すことを躊躇するところに、ドラマへの参加者でもある語り手に、読者は物足りなさを感じてしまう。我を忘れて行動に走ることが出来ないこのためらいは、これまたカヴァデイルの特質たる倫理意識のなせるわざである。ホリングズワースの誘いを拒否した彼の倫理性はゼノビアを救う行動をも抑制する両刃の剣と言えようか。ここに我々は、「行動者としての」語り手の限界を見きわめることが出来る。

一方、「観察者としての」カヴァデイルにも一種の限界があるのを、我々は否定することが出来ない。しかしこの限界は作品の欠点ではなく、逆に芸術的な深みと魅力を与える結果となっている。そこで、「曖昧さ」との係わりから、この問題を詳しく論じてみたい。まず、語り手に対し、全知者が持つ視野の絶対的な拡がりを求めるのは、いささか無理であるの言うまでもない。しかしこの語り手は、重大な局面では必ずと言ってよいほど、それを避けて距離を置くか、遅れて登場するという立場に立たされる。つまり、対象に密着することなく必ず或る距離を置いて観察するので、その観察に限界が生ずるのである。我々はその最も顕著な一例を、「エリオットの説教壇」での対決の場に見いだす。カヴァデイルは、現場に三十分ほど遅く到着したため、対決の冒頭に暴露されたにちがいないいくつかの秘密を手に入れることが出来なかったのを痛感する。

「私は硝煙がいまだ消え去らない戦場に到着したという感じがした。そして一体、どんな問題がここで話されたのだろう。疑いもなく、今まで私の心と想像力をいたずらに苛立たせ

ていた凡てについてなのだ。すなわち、ゼノビアの性格と経歴の凡て、ウェスタヴェルトとの不可解な関係の真の特質、ホリングズワースに対する彼女のその後の目的、またそれに対応する彼の目的、そして最後に、ゼノビアがプリンラに対する陰謀をどの程度知っていたか、そしてその計画の本当の目的は何であったのか。これらの問題点について今までと同様、私は自分の推測に頼る他なかった。」(pp. 215—16) カヴァデイルがここに列挙した疑問点は、同時に読者の知りたいところでもあるが、凡て曖昧なままに残されてしまう。

この点に関してクルーズは、「彼が記述する重大な場面の大部分は、都合が悪いほどの距離を置いて観察されるか、あるいは全く観察されることはない。」⁽¹⁹⁾と断言する。この批評家は、カヴァデイルを単なる「覗き趣味の三文文士」(literary snoop)⁽²⁰⁾と見なし、「信頼出来ない語り手」であると決めつけているわけである。拙論はこの見解に与しない。なぜならば、カヴァデイルは今までの分析で見えてきたように、冷静で写実的な観察眼とピューリタンの倫理意識の微妙な均衡を保つ人物である。視野は限られているが、その範囲内に限り物事の本質を深く見通す識別力は、疑いもなく信頼され得るからである。彼は決して無意識な偽善者でもなく、観察に歪みを持たないのだ。

例えば彼は、ボストンの町通りの表と裏にやどる倫理的な相違を次のように識別する。「表はいつも作り物である。それは世間の人が見るためのものゆえ、見せかけであり隠蔽である。真実は裏に宿り、偽装と虚偽を前面に出して身を守る」(p. 149) ゼノビアについても、豪華な衣裳と宝石の裏に、“passionate, luxurious, lacking simplicity, not deeply refined, incapable of pure and perfect taste” (p. 165) という真の性格を見ぬくのである。外見(appearance)と真実(reality)の表裏関係に対するこの把握は、カヴァデイルが持つ識別力の象徴的な現われである。語り手が、それを忠実に表現して観察の記録とするところに、この作品の明晰さが生まれるのではなからうか。

しかしながら、このような明晰さは語り手の視野の範囲内に限られる。その範囲を越えては、薄暗い曖昧な世界が広がっていることを読者は認めざるを得ない。ホーソーンが語り手カヴァデイルの観察に一定の限界を与えているのは、そこに曖昧さの持つ効果を生み出そうとの狙いを秘めているからではなからうか。この点についてフォグルは、「否定的な側面から見ると、それ(曖昧さ)は目の届く範囲を押しそこを越えては陰がある。」⁽²¹⁾と述べ、更にこの曖昧さの働きのひとつについて、「小説の構造という視点から見ると、ホーソーンは緊張を生み出し結論を引き伸ばすために曖昧さを利用する。」⁽²²⁾との考察を加えている。この見解に立てば、カヴァデイルにとって未知の世界が、物語の背後に伏せられているのではなからうかとの期待感を、読者が持つことになる。そしてこの期待感は、読みの最後まで緊張感を伴って持続するのである。

しかるに、読者の期待感は作品の読了によっても満たされない。なぜならば、カヴァデイルの目の届かない範囲である陰が消滅することなく、依然として曖昧なままに残されるからである。このような曖昧さに、我々はロマンスの持つ神秘的な美しさの根源を見いだすことが出来ないであろうか。カヴァデイルの視野を十分に広げて曖昧さを消去することは、写実的な完璧さを取り戻すことにはなる。しかしそれは同時に、ロマンスの持つ神秘的なかげりを払拭することになるのだ。ホーソーンが小説の語り手という新しい技法をこの作品に導入した時、作者の投影ともいうべきカヴァデイルは、厳しい倫理意識に裏打ちされた明晰な観察力を与えられている。しかし彼の観察は科学者のその如く無限に展開されるものではな

く、或る限界の枠をはめられている。この限界の枠外に拡がる部分が作品に曖昧さの陰を生み、更にロマンスの香りを放つことになるのだ。

語り手の視野の限界と並んで、作品にみなぎるゴシック・ロマンスの要素もまた曖昧さの効果を極立たせている。具体的には、プリシラと「ヴェールを被った婦人」が同一人物であること、プリシラとゼノビアの異母姉妹の関係、催眠術 (mesmerism) や透視術 (clairvoyance) の道具立て、仮面を被った一隊 (Masqueraders) の登場、劇中劇にも比すべきゼノビアの巧みな挿話の神秘性等々。これらが語り手の明晰なそして写実的な観察眼とは裏腹に、曖昧さの特質を彷彿と浮かび上らせる。しかしこれらの中では、何といたってウエスタヴェルトの持つゴシック風の悪魔性が、語り手の認識と描写の枠を越えて薄気味悪く迫ってくる。

「ウエスタヴェルトの全体が、精神的にも肉体的にもべてんのかたまりであるかのように私は感じた。彼の美しい顔立ちは、多分仮面のように引き剥がすことが出来るかもしれぬ。彼は背が高く美しい姿をしているが、多分しばんで白髪で老いぼれた小悪魔であり、彼の苦笑いの表情以外は本物を何も身につけていないのだ。」(p. 95) カヴァデイルのこの描写は、他の登場人物のそれに比べてみると、強い嫌悪の先入観に取りつかれているため冷静な観察とは程遠い。余りにも非人間的な特質を強調しているきらいがある。「この男に対する嫌悪の念は限りなく大きかった。」(p. 172) と明言してはばからない感情は、終始一貫している。カヴァデイルは、ホリングズワースのエゴイズムに対しても、かなり強い反発を示す。しかし彼の計画が挫折した後、ゼノビアを自殺に追いやった自責の念に辛うじて耐えていた時、ホリングズワースの罪を赦す。(p. 243) これは彼の人間的な弱さから生まれた罪であるゆえに赦したのである。ところが、一方のウエスタヴェルトに対しては、最後までかたくなに背を向けて拒否の姿勢を貫く。つまり語り手にとって、彼は理解を越えた異質の世界、つまり悪魔の世界に住んでいるのだ。

従ってカヴァデイルは、ウエスタヴェルトに関して人間的な肖像を我々に描いてくれることはしない。或る人物の描写というよりは、むしろ悪魔の象徴としての存在を浮き彫りにする。「この現代社会を歩きまわっている悪魔」⁽²³⁾とフォグルが呼ぶこの悪魔は、その性格において他の人物群と、はっきり一線を画している。つまり、語り手の認識範囲を超越するがゆえに、この人物は神秘的な曖昧さを生む。そしてこの曖昧さが、他の人物群に付与されている写実性に対蹠的な違いを示しているのだ。そしてこの写実性は、曖昧さとの対比から、明晰性と言い換えることが出来る。以上のことを作品全体の展望から要約すれば、語り手の視野における明晰さと曖昧さの対照は物語の筋に留まらず、人物の配置にもくまなく行き渡っていると言えようか。作品の特質たる「写実小説とロマンスの統合」は、ホーゾンにおけるこのような光と陰の微妙な均衡の表現に他ならないが、この美的な効果は正に語り手の視野の「限界」から生み出されたのである。

(5)

これまで、『ブライズデイル・ロマンス』の語り手とその他の登場人物に焦点を絞り、彼等の人間的な特質を手掛かりにして作品の性格を浮き彫りにしてきた。ここで作品の主題が孕む問題点に、我々の目を転じてみたい。梗概から明らかなように、それは「現代アルカデ

「ディア」建設が、そこに参加する人間同志の葛藤によって失敗に終るドラマであると言えようか。理想の光を求める社会改革の純粋な運動が、結果的には人間的な悲劇の闇によってその幕を閉じる。牧歌的な田園風景も皮相的な美しさに過ぎず、その裏面は原罪の暗い陰で被われていると言えるのだ。この表裏関係についてフォグは次のように述べている。「アルカディアは実現不可能な夢を示す。しかしその裏には、人間精神の凡ての歴史によって支えられたひとつの尊厳と、心理的な実体とが存在する。ブライズデイルは悲劇的な行為と比較すれば、色褪せるが、その悲劇を和らげてもいる。そしてホーソーンが序文で言っている如く、その悲劇に、距離が持つ美しさと魅力とを与えている。」⁽²⁴⁾

この批評家の見解に従えば、個人的な人間関係が強烈に浮き彫りにされるため、舞台となったフリーエ主義の社会改革運動は悲劇を引き立てる単なる背景としての役割しか果たさないと言える。たしかにこの小説は、社会運動を描く作品と見なせば、失敗作としか言いようがない。社会改革と言っても、極めて単純素朴な実験に過ぎない。そして語り手の関心がもっぱら人間関係に向けられているため、「理想的田園」に対するロマンチックな情熱は、そこに織りなされる人間模様の悲劇の中に吸収され、どこかへ雲散霧消してしまうのだ。従って批評家の中には、この作品を社会改革運動の視点から論ずるよりは、むしろ女性解放運動の嚆矢として捉える人がいる。ゼノビアが「エリオットの説教壇」で、女性の不当な地位、女性の自由と名誉、そして女性の公的な発言権の問題を訴える場面があるからである。(p. 120)

Marius Bewley は、ヘンリー・ジェームズに対するホーソーンの影響を重視し、『ブライズデイル・ロマンス』と *The Bostonians* (『ボストンの人々』) との詳細な比較を試みている。⁽²⁵⁾ この両作品はともに、ビューリーが指摘するように、人物配置の構成、素材等についていくつかの相似的な要素を含んでいる。更にジェームズへの「影響」という点で最も説得力が強いのは、主題としての女性解放運動であろう。しかし両作品の構造という視点から見直すと、この説得力もいささか怪しくなってくるのではなからうか。すなわち、『ボストンの人々』が、公的な婦人解放運動と個人的な愛情の相克と乖離という主題を、作品全体にわたって展開しているのに対し、『ブライズデイル・ロマンス』はたった一箇所での問題に言及しているに過ぎない。この違いは、女性解放の問題に関する限り、主題の質的な相違と言えるのだ。

『ブライズデイル・ロマンス』で取り上げられた婦人問題のひとつを更に詳しく考察してみたい。ゼノビアは、女性の公的な発言手段について次のような意見を述べる。「筆は女性に適していません。女性の力は極めて自然で直接訴えるからです。女性の知的な閃きと心の深さを世間の人に認めさせるには、なまの声を通してのみ可能なのです。」(p. 120) ゼノビアのこの言葉は、『ボストンの人々』の中で活躍する女性解放論者、Olive Chancellor の発言様式と暗合していて興味深い。つまり彼女は自分の思想の代弁者として、聴衆を魅了する雄弁術に長けた Verena Tarrant を起用して前面に押し出すのである。ヴァリーナの雄弁は、オリブのライバルである Basil Ransom が、“The Rational Review” で健筆を揮うのと対照的である。

婦人運動に対する語り手カヴァデイルの見方は、観察の人にふさわしく客観的で洞察力に富んでいる。「彼等(女性たち)は生得的な改革者ではなく、例外的な不幸の圧力によってはじめて改革者となる。ゼノビアが男性に対する女性の全般的な闘いを取り上げた時のあの

憎悪心によって、私は彼女の内面的な悩みを押し量ることが出来た。」(p. 121) この語り手は、一般論的な形を取る女性運動のころもの下に、個人的な体験が醸成しているとの構造的な捉え方をする。これも、カヴァデイルの表裏関係を厳しく識別する性向のひとつの現われであろうか。女性運動に対する語り手のこの見解はまた同時に、『ボストンの人々』の中で展開されるジェイムズの見解と一脈通じていると言えないであろうか。

一方のホリングズワースは、女性運動に対しても、おのれの狂信的な偏見をいささかも改めようとはしない。「女性の個々の行動は、過去、現在、未来にわたり凡て偽りであり、馬鹿げていて、うぬぼれが強く、自己の最善のそして最も聖なる資質を駄目にしてしまう。よき影響力を欠き、耐えられない害毒を流す。男性は女性が居ないと悲惨であるが、女性は彼女の認められた主人たる男性が居ないと化け物となる。それも、ほとんどあり得ないような、そして今まで想像していただだけの怪物というべきだ。」(pp. 122—23) 女性の心を捉えるのに、甘言ではなく、独断的な冒瀆の言葉が、一層の効果を発揮するとホリングズワースは信じているのであろうか。彼は遠慮会釈なく、女性に対する攻撃の手綱をゆるめようとはしない。これはまさしく彼のエゴイズムの率直な投影である。

ホリングズワースの暴言に対し、プリシラは「おとなしい寄生虫、更に強力な存在を穏やかに反映する影」(“the gentle parasite, the soft reflection of a more powerful existence”) (p. 123) でしかない。彼女は初めから婦人運動とは無縁の失格者であり、場合によっては裏切者ですらある。またホリングズワースの暴言に対するゼノビアの反応は、カヴァデイルが興味を持つところだが、これまた彼を失望させる。いな、失望という言葉では軽すぎる感情を彼は抱く。「私が驚いて怒りの気持で一杯になったのは、彼女がただ惨めな様子をしていただけだ。涙が目にも光っていたが、それは怒りからではなく、全く悲しみからであった。」(p. 123) ゼノビアは婦人解放指導者として、オリヴ・チャンセラーと覇を競う強靱さに欠けている。婦人運動には不向きであることが、女性としての魅力を逆に引き出してもいる。それゆえ、ゼノビアはバジル・ランサムとの結婚を選んだヴァリーナ・タラントとの親近性がずっと強いのではあるまいか。

チェイスは、知識人と改革者を描くいくつかの小説の中で、「ホーソーンの『ブライズデイル・ロマンス』は、或る詩的な美しさと魅力がある。それは、はっきりと名付けようがないホーソーンの魔術であり、主題において彼の先導に続く一群の小説を超越する。」⁽²⁶⁾と述べている。ホーソーン独特の魅力は何人も否定することが出来ないが、その原因を知識人の社会改革運動との係わりで捉えようとする点は、拙論の趣旨から受け容れ難い。なぜならば今まで考察してきたように、社会改革・婦人解放の運動は、ほんの萌芽として取り扱われているに過ぎない。そして作品全体から見れば、主要な主題としての重みがないからである。しからば、チェイスが「ホーソーンの魔術」と呼ぶ詩的な魅力はどこから生まれるのであろうか。それはまた繰り返えしになるが、拙論の中心点である語り手の特質、彼の繰り返えす世界の光と陰が交差する微妙な対照にこそ求められるべきであろう。

しかしそれと同時に、形式の上からみてテキストに張りめぐらされて現われるホーソーン独特の象徴的な技法が、物語に詩的な深さと輝きをもたらす一助となっていることもまた否むことが出来ない。ワゴナーが『ブライズデイル・ロマンス』を身の上話としても、またロマンスとしても失敗作であると見なしたことはすでに紹介したが、彼はもうひとつの読み方によって独自の価値を見いだそうとする。「この作品が小説ではなくて詩であるかの如く、

木目 (texture) に対し最も綿密な注意をはらって読むことを、私は意味するのだ。」⁽²⁷⁾という立場が彼の出発点となる。これを要約すれば、二つの語 “veil” と “fire” を鍵となる象徴として捉え、それらがテキストの中に織りなされると、“darkness” と “cold” の心象 (imagery) を形成すると彼は論述する。彼の論理の展開とその結論は、まことに整然としていて見事という他はない。ワゴナーの論述は、個々の具体的なイメージを積み重ねて、そこから作品全体の持つ最終的な比喩的意味へと達する帰納的な方向を辿る。

これもひとつの方法ではあるが、どうしてもその展開に伴う論理の飛躍を、ワゴナーは免れていないように思われる。代表的な個々のイメージの積み重ねを一方向的に作品全体の意味へ結びつけようとする試みは、換言すれば部分部分の積み重ねにより、有機的統一体たる小説全体の把握へと迫る一方交通に他ならない。それは、「木を見て森を見ず」の陥穽に陥る危険を多分に孕んでいる。それゆえ、部分から全体への方向のみならず、全体から反転して部分へと向かう相互補完的な (complementary) 交流こそが作品の把握に必要ではなかろうか。すなわち、ワゴナーの方法を補うため、作品全体の意味と美的な効果をまず感知し、ここを出発点として何故この芸術的な価値が生み出されるのか、個々の具体的なイメージとの関係を考察する演繹的な道筋を辿るべきである。しかしながら拙論はホーソンにおける象徴の研究ではないので、ワゴナーの詳細を窮めた展開を逆に辿る筋道は避けることにする。

『ブライズデイル・ロマンス』における詩的な美しさと魅力は、テキストの木目から判断する限り、たしかにワゴナーが指摘する如く、比喩的表現たるイメージの効果に負っている。我々は、作品におけるイメージの特質が、『緋文字』のそれと対照的に異なっているのを知る。つまり、イメージとは気付かせない程目立たぬ、地味なイメージの効果だが、潜在的に働いているのだ。これは、「ロマンスと写実小説の統合」という作品の性格にぴったり適合する比喩的表現のころもであるにちがいない。

(昭和51年 9月27日)

注

- (1) Hyatt H. Waggoner, *Hawthorne: A Critical Study*, Revised Edition (Cambridge, Mass.: The Belknap Press of Harvard Univ. Press, 1963), p. 188.
- (2) Frederick Crews, *The Sins of the Fathers: Hawthorne's Psychological Themes* (New York: Oxford Univ. Press, 1966), p. 194.
- (3) Yvor Winters, “Maule's Curse,” in *In Defense of Reason* (Chicago: The Swallow Press, 1938), pp. 169-70.
- (4) Henry James, *Hawthorne* (Ithaca, New York: Cornell Univ. Press, 1966), p. 90.
- (5) *Ibid.*, p. 105.
- (6) *Ibid.*, p. 106.
- (7) Richard Chase, *The American Novel and its Tradition*, Doubleday Anchor Books (Garden City, New York: Doubleday, 1957), p. 14.
- (8) Nathaniel Hawthorne, *The Blithedale Romance and Fanshawe*, Centenary Edition Vol. III (Ohio State Univ. Press, 1964), p. 70. 以下テキストの引用は凡てこの版による。
- (9) Henry James, p. 105.

- (10) Richard Harter Fogle, *Hawthorne's Fiction: The Light and the Dark*, Revised Edition (Norman, Okla.: Univ. of Oklahoma Press, 1964), p. 186.
- (11) Crews, p. 197.
- (12) Chase, p. 87.
- (13) Waggoner, p. 208.
- (14) Fogle, p. 184.
- (15) Winters, p. 162.
- (16) Crews, p. 204.
- (17) James, p. 108.
- (18) *Ibid.*, p. 108.
- (19) Crews, p. 196.
- (20) *Ibid.*, p. 200.
- (21) Fogle, p. 11.
- (22) *Ibid.*, p. 12.
- (23) *Ibid.*, p. 187.
- (24) *Ibid.*, p. 172.
- (25) Marius Bewley, "The Blithedale Romance and The Bostonians," in *The Complex Fate* (London: Chatto and Windus, 1968)
- (26) Chase, p. 84.
- (27) Waggoner, p. 188.

Summary

Realism and Romance in *The Blithedale Romance*

Yoshiaki ICHIKAWA

The Scarlet Letter, which is unanimously recognized as the greatest masterpiece by Nathaniel Hawthorne, can be characterized by a perfect combination of historical romance in the seventeenth-century New England and allegory derived from the Puritan view of life. Many critics say, on the other hand, that *The Blithedale Romance* is a failure, because it is disintegrated into two separate parts of Gothic romance and the narrator's realistic viewpoint.

Contrary to this conventional interpretation, it is insisted and proved in this essay that these two characteristics, through Hawthorne's originality, make this work a piece of successful amalgamation of romance and realism. It is Coverdale, narrator of the story who stands at the crucial position that makes this difficult integration. In this sense, Hawthorne created quite an original type of narrator. We can say *The Blithedale Romance* is an example of this sort of hybrid containing the two heterogeneous elements, which can often be found in the history of the American novels.

Miles Coverdale joins in the construction of "the Modern Arcadia" based on Fourierism, an experiment in communal living. In the group of its participants, he is not so much an active reformer as a cynic observer of the movement. The observer's focus is on the triangular situation between the egotistical, unconsciously hypocritical Hollingsworth and his two girl friends, the passionate, sensuous Zenobia and the sibylline, ambiguous Priscilla. As the story goes on, Hollingsworth tries to use Zenobia's funds for the reformation of criminals. He relentlessly forsakes Zenobia, accusing her for the conspiracy of getting rid of her rival. Her pride is badly hurt, and she finally commits suicide.

As the catastrophe of the drama approaches, the narrator finds himself involved in the intrigue and suffers from moral pain. This is because he is essentially a man of morality inherited from Hawthorne, though the narrator's view is quite realistic. We can say his morality is not incompatible with his realistic observation. His morality, however, prevents him from the rescue of Zenobia and from confessing his heart to Priscilla whom he secretly loves. His self-restraint from "the forbidden fruit" is caused in consequence of the effect of his morality.

We also find his scope of view rather limited, because the narrator always tries to keep himself a little aloof from his friends. In addition, he comes too late on the spot at the critical moment, and consequently he cannot be in contact with possible important information which he would like to know. Though his discrimination is piercing and probes into the true natures of his friends, because of the limitation of Coverdale's observation, we cannot but feel some ambiguity beyond his lucid scope of view.

The delicate contrast between sharp discrimination within his observation and ambiguity or obscurity beyond gives birth to an aesthetic equilibrium of light and dark which is characteristic of Hawthorne. The effect of romance in the story is caused by the mysterious ambiguity which Hawthorne consciously or unconsciously tries to give in the limited scope of the narrator. Of all the elements of Gothic romance in the story, Westervelt, evil mesmerist, appeals to us as appalling, and Coverdale feels irreconcilable hatred towards this person because of his inhuman idiosyncrasy. He is described, in consequence, as a symbol of devilish falseness.

"The Modern Arcadia" turns out to furnish a mere background of the tragical drama. Therefore, the social movement and the feminist movement are no more than subordinate themes in contrast with the leitmotif of the human tragedy. We cannot deny, moreover, that the poetic beauty of the story is created by Hawthorne's symbolic device of texture, that is imagery. The relation between each piece of imagery and the organic whole can be traced reciprocally, and the artistic value of the work will be made out appropriately.